

# 川崎病における血小板と血管壁の interaction —ガンマグロブリンの影響を中心として—

聖マリアンナ医科大学小児科 山田 兼雄、宮地 良和  
慶応大学小児科 稲垣 稔

川崎病における血管炎については病理組織学的検討のみならず、血液凝固、血小板、免疫などの分野からも種々検索が進められてきた。著者らは血管壁と血小板の相互作用である血小板粘着現象に注目し、川崎病における血小板粘着、血栓形成を検討してきた。今回 intact の静注用 gammaglobulin (intact IVGG) 大量療法が血小板粘着に与える影響について検索した。

## 方 法

対象とした川崎病患者は表1に示すプロトコールに従い、intact IVGG (Venilon, Venoglobulin [またはGV523]) を  $400\text{mg}/\text{Kg}/\text{day}$ 、4日間、 $200\text{mg}/\text{Kg}/\text{day}$ 、4日間、あるいは Aspirin  $50\text{mg}/\text{Kg}/\text{day}$  との併用群、コントロールとしての Aspirin  $50\text{mg}/\text{Kg}/\text{day}$  単独投与群に分け治療し、臨床的効果、血小板凝集能、Baumgartner 法による血小板粘着能などを検索した。

表1に示した intact IVGG 群は、第1、2、3、群各4例、計12例、アスピリン群の第4群は1例であった。Baumgartner については度々記載したので方法は省略する。

表1 治療プロトコール

GROUP 1: INTACT IVGG 200MG/KG/DAY 4DAYS,--> ASPIRIN 50MG/KG/DAY
GROUP 2: INTACT IVGG 400MG/KG/DAY 4DAYS,--> ASPIRIN 50MG/KG/DAY
GROUP 3: INTACT IVGG 200MG/KG/DAY 4DAYS ASPIRIN 50MG/KG/DAY ----->
GROUP 4: ASPIRIN 50MG/KG/DAY OR -----> FLURBIPROFEN 4MG/KG/DAY

## 成 績

### 1. 臨床効果

解熱までの期間、CRP陰性化までの期間、冠動脈病変の発生のいずれにおいても intact IVGG 投与群の方がすぐれており、冠動脈病変はアスピリン群では10例中2例の冠動脈瘤の発生をみとめたが、intact IVGG 群12例では1例に一過性の拡大病変を認めただけであった。

### 2. 血小板凝集能

intact IVGG 群 (第1、第2群計8例) とアスピリン群10例のADP ( $2\mu\text{M}$ ) 凝集の経時的変化を図1に示したが、intact IVGG 群では病初期 (第1病週前後) の血小板凝集能亢進を抑制する効果は乏しく、アスピリンは抑制効果を示した。なお併用群ではアスピリン群と同様の抑制効果が認められた。IVGG 使用後にアスピリンを使用した群ではアスピリン使用中の血小板抑制効果は安定し、強力であったような印象が得られた。

### 3. 血小板粘着能

Baumgartner 法による血小板粘着能の検索では、前述の血小板凝集能の変化と異なり、図2に示すごとく、intact IVGG群で明らかな血小板粘着抑制効果が示され、アスピリン群よりも強く血小板粘着能が低下していた。併用群では、intact IVGG群と同様に強い抑制効果が認められていた(図2)。

またすでに報告したごとく、血管壁をあらかじめ intact IVGG で前処理し、健康成人血液を用いて灌流実験を行うと、血小板粘着能の低下が認められ、plasmin、pepsin 処理  $\gamma$ globulin を用いて前処理するとむしろ血小板粘着、血栓形成の亢進が認められる。

図1 IVGG、ASAの際の血小板凝集

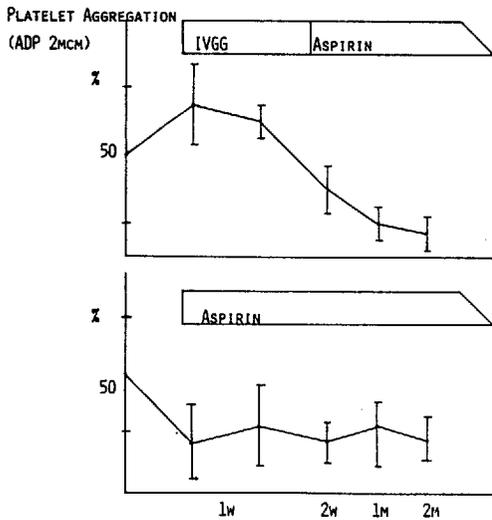
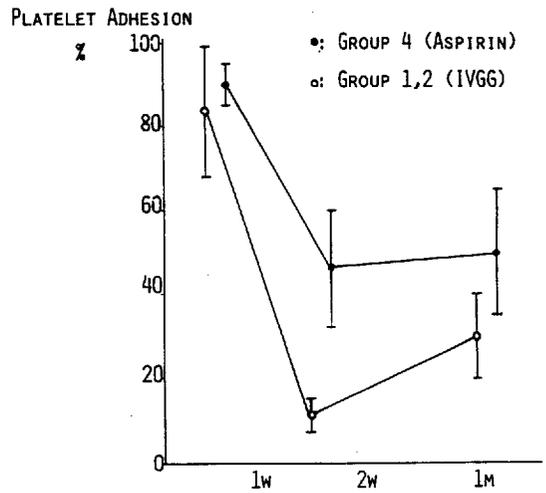


図2 IVGG、ASAの際の血小板粘着





## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



川崎病における血管炎については病理組織学的検討のみならず、血液凝固、血小板、免疫などの分野からも種々検索が進められてきた。著者らは血管壁と血小板の相互作用である血小板粘着現象に注目し、川崎病における血小板粘着、血栓形成を検討してきた。今回 intact の静注用 gammagloblin(intact IVGG)大量療法が血小板粘着に与える影響について検索した。